

2022.11.19 大阪自然史フェスティバル 日本野鳥の会大阪支部 講演

榎本佳樹生誕150年記念事業2023 プレ企画

えのもとよしき

なかにし ご どう

榎本佳樹と中西悟堂

～野外鳥類研究の草分けと野鳥の会創始者 二人のつながり～

- 1 榎本佳樹 野外鳥類研究の草分け
- 2 中西悟堂 日本野鳥の会創始者
- 3 榎本佳樹の「野鳥便覧」
- 4 中西悟堂の「野鳥ガイド」
- 5 「野鳥」誌に見る榎本佳樹
- 6 生誕150年記念事業について



榎本佳樹 大阪住吉浦にて
1936年（昭和11年）12月 63歳

日本野鳥の会大阪支部 支部長 納家 仁

野外識別の草分け、伝説の指導者 榎本佳樹 翁

発足当時の大阪支部の探鳥会で、指導者として活躍された榎本佳樹は、当時「鳥学界の至宝」と称されるほど著名な野外鳥学の第一人者でした。

その著書「野鳥便覧上・下」は、野外識別に重点をおいた画期的な野鳥図鑑であり、鳥の全長や翼の長さなどの数値は、現在の鳥類図鑑の多くが野鳥便覧の数値を引用しています。



▲榎本佳樹 / (1873年～1945年)
写真 1938年 (昭和13年) 65歳

野鳥の父 日本野鳥の会創始者 中西 悟堂

日本野鳥の会の創始者・思想家・歌人・詩人・文化功労者・天台宗僧侶
“野の鳥は野に”

学者が書く文章はなかなか世間に広がらないとして、日本鳥学会などの応援もあって、文学者・仏教者であった中西悟堂が「野の鳥は野に」を理念に昭和9年（1934年）に「日本野鳥の会」を創設し、戦後も日本の自然保護に力を尽くし、「人類にして鳥類」と評されるほど多くの国民に影響を与えた人物です。

業績

- ・「野鳥」や「探鳥」は中西悟堂の造語であり、悟堂が日本に広めた言葉です。
- ・戦前から野鳥の大量・無差別な乱獲が行われていた「カスミ網猟」禁止（昭和32年）や、「鳥獣保護法」（昭和38年）などの法律制定に尽力しました。その後、カスミ網は所持・販売も禁止となり、ほとんど密猟が見られなくなりました。鳥獣保護法は「鳥獣および狩猟に関する法律」に改称され、メジロなどの野鳥の愛玩飼養も事実上、法律で禁止されるなど、悟堂の残した業績は現在でも高く評価されています。



▲中西悟堂（1895年～1984年）

76年前を再現・・・古市古墳群探鳥会 75周年記念 2013年2月17日

昭和12年（1937年）の2月18日、日本野鳥の会創設者 中西悟堂と大阪支部の指導者であった榎本佳樹が藤井寺市の仲哀天皇陵などを探鳥したことが、昭和12年4月号の「野鳥」誌に「大阪市郊外の半日」という表題で中西悟堂によって報告されている（以下に一部紹介）。当時、中西悟堂41歳、榎本佳樹63歳、まだ仲哀天皇陵周辺は住宅もまばらで、のどかな田園地帯が広がっていた。

仲哀天皇の御陵の濠には二十六羽のマガモがいた。濠の向こう側にいるのを遠くからみると頭が黒く、背中が白く、この黒白の染分けのように見えるが、水脈をひいてこちらへ近づくを見ると、嘴の鮮やかな黄と光沢のある青緑色の頭とが、色鉛筆で塗らたように見え、離水して飛ぶうしろ姿では、翼を横につらぬく二筋の白い線がくっきりと目立つ。雌雄を数へ分けてみると、いずれも十三羽づつで完全なPairとなっている。浮いている真鴨たちの先頭を切るのは四羽のカイツブリだった。キキキリキリキリリリリという声が時々空気を錐揉みのようにつんざく。

濠に沿うてまがると御陵参拝所がある。石垣をめぐるし、小さい鉄の門をあしらひ、黒松に囲まれているが、そのあたりには葡萄の棚があり、棚の下には豆畑などがあって、モズが飛び、ホオジロが鳴き、草がくりの水のほとりからキセキレイが舞立つては、深い波状に飛ぶのであった。又しても雲を背中にトビの帆翔。榎本氏の説明によると、この御陵ではオシドリ、トモエガモ、ゴイサギが見られ、又アオサギが営巣したこともあるそうである。私達は程近い応神天皇の御陵へと向かった。・・・

2013年2月17日、大阪支部75周年記念探鳥会として、偉大な先人が歩いた古市古墳群を訪ねた。50人の参加者が集まり、57種もの鳥に出会えた。支部の歴史に残る意義深い探鳥会となった。



日本野鳥の会大阪支部 古市古墳群 探鳥会 2013.2.17 75年前に中西悟堂と榎本佳樹が探鳥した古市古墳群での探鳥会



中西悟堂

榎本佳樹

1937年に確認された鳥18種

トビ、カイツブリ、コカワラヒワ、カラス、アオジ、スズメ、モズ、マガモ、ヒヨドリ、ホオジロ、キセキレイ、ヒバリ、アオサギ、ノジコ、コガモ、ツグミ、オシドリ、ビンズイ



むくどり通信
No.225
2013年5月から

榎本と悟堂の
年の差は22歳

2 榎本佳樹とは

1873年（明治6年）11月5日徳島市生まれ

【幼・少年期】

病弱であったのが、15歳の頃から兄の狩猟について行くようになり、その後一人で郊外に野鳥を見に出かけるようになり脚が丈夫になり健康体に転換。和船漕の稽古をして上手にできるようになり父や兄の釣りに行くときの船頭をするようになり、河口部の干潟にいるシギ・チドリ類やカモ類などの水鳥を近くから観察することに。

当時、鳥の参考書は何もなく、中学校図書室にある英米何れかの国の博物書や百科事典などを借り、英和辞典を引きながら調べたり、野外で見聞したことや兄が採った鳥の測定を記帳したりして鳥類研究を開始。

榎本佳樹とは

【軍人時代】

中学校卒業と同時に徴兵検査を受け「甲種合格」、1894年(明治27年)12月に士官候補生として丸亀部隊歩兵隊入隊。1911年(明治44年)大尉で軍隊を退く。

軍人として澎湖島、台湾本島、満州(日露戦争)、朝鮮東北部などに赴任。台湾、朝鮮、満州等では勤務時間外に、ある程度鳥類研究の機会を得る。独学で英語の読書力の増進に努め、鳥類に関する知識を高めた。

【徳島～高野山～大阪】

1912年(明治45年)1月、徳島に移住。1916年(大正5年)日本鳥学会入会。1917年(大正6年)1月～1933年(昭和8年)3月、高野山中学勤務。この間、農林省の委託を受け付近一帯の鳥類調査。退職後に大阪に移住。大阪支部の指導員として活躍。1945年(昭和20年)1月肺炎をわずらい急逝(72歳)。6月大阪大空襲で都島の自宅が炎上、野鳥便覧の原図や未発表の資料が焼失した。

大阪支部誕生のころ 第2代支部長 藤原廣蔵 記 抜粋

大阪支部が出来てからは実地指導者と云う役割に責任を感じられて、探鳥会には参加を欠かされたことがないばかりでなく、数日前に下調査に出掛けられることが普通であった。

野外では一刻も鳥から注意を外らすことはなく、車中でも常に窓外の鳥影を求めて居られたもこのことは高著「野鳥便覧」上巻に「観察の機会」と云う項目中で「鳥類の中には一度見聞の機会を逸したら、観察者の一生の間に再びそれを見聞することの出来ない様なものも少なくないから常に油断なく注意していて不覚をとらぬ様にせねばならぬ...」とあるのを自ら実行して居られたのである。

鳥類の野外識別については我国の草分けで、普通最も困難とされているシギ、チドリ類、ワシタカ類、海鳥類などの野外識別は先生の最も得意とされるところで、この方面の先駆者である。従って当時、大阪支部の催す淀川、住吉浦などの探鳥会は誠に特色のあるものであった。

※1937(昭和12)年2月19日、日本野鳥の会阪神支部として設立
(昭和14年に神戸支部が分離し、大阪支部と改称)

3 中西悟堂とは

1895年（明治28年）11月16日石川県金沢市生まれ

【幼・少年期】

幼名「富嗣」、2歳のときに父母の死により、父の長兄中西元治郎の養子となる。

10歳で養父元治郎が仏門に入り、富嗣も伴われて上野の東叡山東漸院（とうぜんいん）に住む。この年秩父山中の寺に預けられ坐行、滝の行、断食を行う。この頃、鳥に親しむ。

16歳、天台宗深大寺（じんだいじ）において出家し、法名「悟堂」となる。

【僧侶時代】 17歳～30歳

この間、愛媛、島根、東京、埼玉などの寺を転々としながら歌集、詩集を多く出版。

比叡山の天台宗・宗務庁勤務を最後に寺勤めから離れ、文筆業に舵を切る。

中西悟堂とは

【虫や鳥とともに】

1926（大正15・昭和元）年、東京千歳村（現在の世田谷区烏山付近）の野中の一軒家で木食菜食の生活に入る。

1929（昭和4）年11月、3年半に及ぶ千歳村の生活を切り上げ杉並区井荻町（善福寺風致地区内）に移住。水棲昆虫や淡水魚ヘビ等の生態観察に没頭し、その後野鳥の生態観察に取り組む。

1931（昭和6）年、36歳の頃、カラス、オナガ、スズメ、ホオジロなどの鳥を自由に馴らし、放し飼いで飼って庭に放したり、付近を連れ歩いたりして評判となる。

1932（昭和7）年、37歳「蟲・鳥と生活する」出版



肩にムクドリ、右手の先にカケス いずれも放し飼いの鳥
「野鳥を訪ねて」日新書院刊（昭和17年5月）から

中西悟堂とは

【日本野鳥の会創設～終戦 大衆啓発期】

1934（昭和9）年、39歳、鳥学者や文化人らの賛同後援を得て、3月、「日本野鳥の会」を創設する。5月機関誌「野鳥」を創刊。6月、わが国初の大探鳥会を富士山麓須走で行なう。

我國民間探鳥会の皮切りとなった歴史的な富士須走探鳥会（昭和九年六月二日、三日）



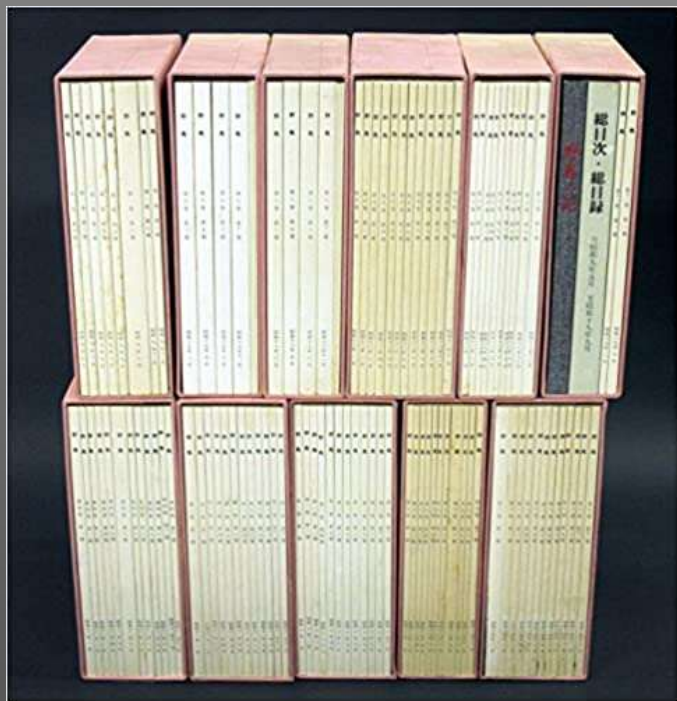
（前列左から）北原白秋、穂積忠、窪田空穂、半田良平、柳田国男、中西悟堂、金田一春彦、中村星湖（後列左から）荒木十敏、岡茂雄、戸川欽骨、加来郡、松室重行、柳田三千子、菅原夫人、若山喜志子、菅原恒寛、金沢秀之助、猪川茂、柳田千枝子、金田一京助、杉村楚人冠、内田清之助、清棲幸保、高田兵太郎、内田清一郎、高田昂、松山資郎、三橋小一郎、高田重雄、関口俊治郎の諸氏。

尚以上のほか、奥村博史、竹野家立、古見一夫（写真外）の三氏があり、猪川茂氏は迦葉山コノハズクの録音盤を持参、披露した。

中西悟堂とは

【日本野鳥の会創設～終戦 大衆啓発期】

1937（昭和12）年、42歳、この年より終戦にかけて、「野鳥ガイド」「鳥蟲歳時記」「野禽の中に」「野鳥を訪ねて」「野鳥記」「野鳥の話」「渡り鳥」また詩集「叢林の歌」などを出版
1944（昭和19）年、49歳、機関誌「野鳥」この年の9月号を最後として用紙の配給を絶たれ、廃刊となる。



昭和16年11月号
この号は、本文164頁にも及び、立てることができほどの厚みがある。この号には「日本鳥類二千六百年史」という年表が33頁にわたり掲載されている。

昭和9年5月から昭和19年9月までに発刊された雑誌「野鳥」全115号（写真は復刻版）

【戦後の十余年 鳥類保護のための政治闘争期】

1947（昭和22）年4月、「野鳥」誌再刊第1号発行。
1954（昭和29）年～ 空気銃の取締りの実現、
カスミ網猟の阻止運動（1957年：使用禁止）、
鳥獣保護法案の要綱策定（1963年：新法成立）

【経済高度成長による全国土の自然破壊への抵抗期】

1970（昭和45）年、日本野鳥の会を財団法人に。
1977（昭和52）年、文化功労者表彰。1981年名誉会長に就任
1984（昭和59）年12月死去 89歳

悟堂が遺した言葉

- ◆野のものは野に置けという思想。それが『野鳥』
- ◆人間は月へ行けても、木の葉一枚作れない

岩湧山に婦人も交じる 探鳥ハイキング 風雅な大毎野鳥の会

昭和12年7月19日付 毎日新聞 「第1回探鳥ハイキング」の記事

以下要約

- ・ 7月18日午前6時半 難波駅から特別仕立の「探鳥列車」で三日市駅に
- ・ 岩湧寺に向かった会員200余名 うち20余名の婦人会員
- ・ 3班に別れて「鳥寄せ」を行い鳴声とその姿を見学
- ・ 午後 岩湧寺客殿で観会式を兼ねて講演会を開催
- ・ 森田理学博士（初代大阪支部長）の挨拶に次ぎ、
「関西の鳥宝」榎本佳樹翁が「大阪近郊の野鳥」と題し講演
- ・ 最後に東京からはせ参じた日本野鳥の会主宰中西悟堂氏が「野鳥とハイキング」と題し、鳥の鳴声の声帯模写まで交え1時間半にわたる講演
- ・ この日同会で聞いた鳥の鳴声は26種
- ・ 今回のハイキングを記念するため野鳥愛護の注意書を記した札を山中2か所に立て、愛鳥観念を涵養することに

榎本佳樹の第一声は

「わたくしは飼い鳥のことは 鶏のことも知らん」

3 榎本佳樹 の「野鳥便覧」



上巻 1938年
3月18日印刷



下巻 1941年
6月15日印刷

上巻 昭和13年（1938年）、下巻 昭和16年（1941年）に日本野鳥の会大阪支部（上巻は前身の阪神支部）が発行

上巻は初代支部長森田淳一氏が、下巻は藤原廣蔵第2代支部長（当時は幹事）の全面的な資金援助で発行。発行部数は両巻とも500部。

古書店に出ることもない幻の図鑑である。

美しく正確な図版

● 生息環境を背景に

● 野鳥画としての価値も高い

小さく描いたため、細部が表れていなかったり、省略された部分があったりするのもしやむを得ないことである。しかしながら相当親切に描いたつもりであるから、図画の欠点のため、種類の違ったものに見える様なのは、沢山あるまいと信じている。



鳥のみを描いた一般的な図版

原色野外鳥類図譜

昭和13年 下村兼史著



第VI圖



第IX圖



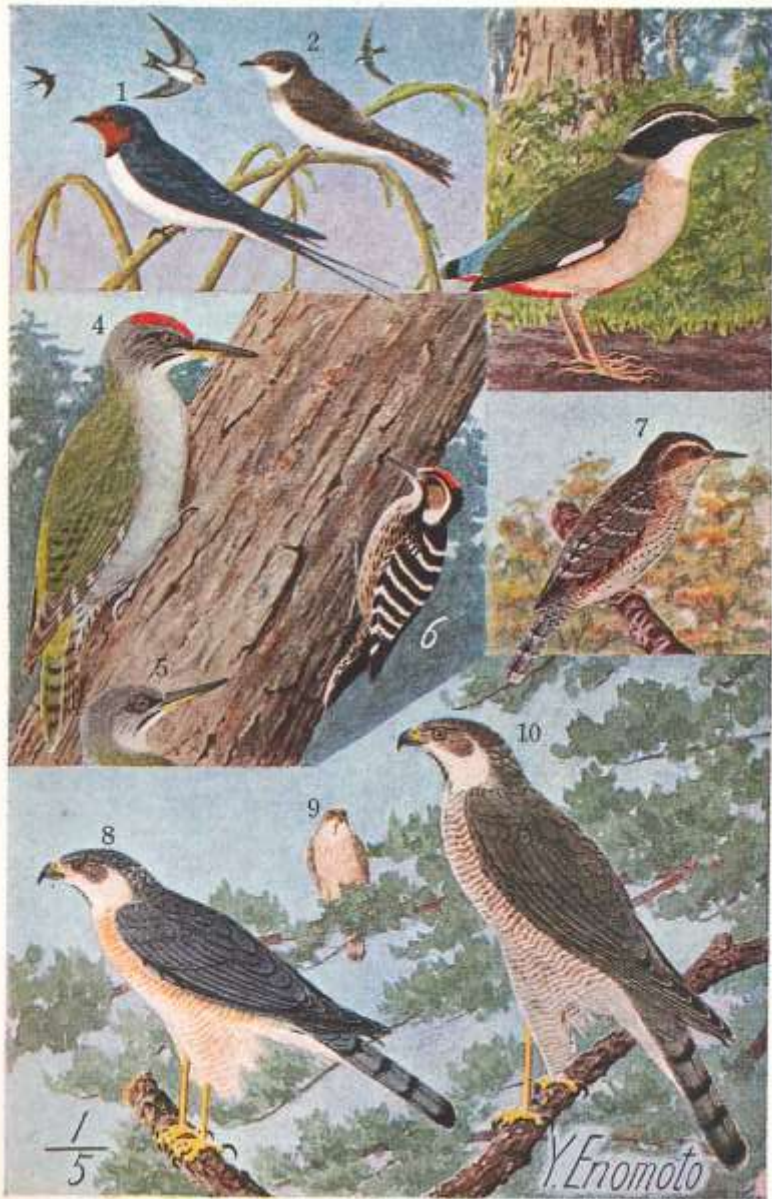
第XIII圖



第XIII圖



VI



1/5

VIII



1/5







面上に高く出て軽く浮び、バンが遊ぶ様に、頭部を前後に動揺させて調子をとる。鳴聲はチリッ、ピリッ、キリッ等に聞こえ、トウネンの聲に似た所がある。飛方は他の小型鷓類に似てゐる。蕃殖期以外は主に水上生活をしてゐて、陸地から遠い外海で見ることもしくない。雌雄二羽だけで居ることもあるが、十數羽乃至五六十羽、或はそれ以上の群をなしてゐる。食餌は昆蟲類、貝類、其他水面に浮遊する小動物等が主で、それ等は地上を歩いて採ることもあるが、通常右へ左へと電光形に遊ぎながら、忙しうに採食する。獵鳥となつてゐるが、習性上早く絶滅する虞がある外、水を遊いでゐる形が優美で、且頗る愛らしい點もあるので、寧ろ保護を加へる必要がある。北半球の最北部諸地方で蕃殖し、冬季は歐洲南部、アフリカ北部、印度、馬來半島、ニューギニー北方、ペルー等の緯まで南下する。我國では樺太、千島、北海道、本土、伊豆七島、琉球、臺灣、朝鮮等に分布し、少い種類であるが、前種よりは多い。

クサシギ XXI の 1

Tringa ochropus (LINNÆUS) 鷓 科

獵。冬。所により旅。鷓型。ムクドリ大。少。河川湖池等の水邊とか、水溜のある水田の様な所に棲み、腹部が白く、背が暗褐色乃至黒褐色に見えるムクドリ大の鷓で、飛んでゐる時には、腹、上尾筒、尾羽の大部分等の顯著な白色部が現れ、又飛立の際、通常ツイ、ツイツイ（各節共ツガ低くイが上る）と清らかな鳴聲を出す。飛方は直線状であるが、飛立つて暫くの間はタンギに似た所がある。大群をなすことなく、通常單獨か二三羽位、多くも四五羽までの小群を見るに過ぎない。食餌は水邊の小動物が主である。採餌のために歩いてゐる時、イソシギの様に、體の後部を上下に揺る習性があるが、同鳥の程甚しくはない。獵鳥として肉味は佳良であるが、棲住数が少いため、濫獲すれば早く絶滅する虞があるので、保護の必要がある。形が優美で、飛ぶ時の鳴聲も悪くないから、風致上の價值も少くない。歐亞兩洲の各北部で蕃殖し、冬季にはアフリカ北部

印度、印度支那、滿洲、支那、日本等に渡る。我國では廣く各地に分布するが、數に於ては多くない。本種と見誤ることがあると思はれる鷓は、イソシギ、タカブシギ、コアヲアシ、ギ位のものであるが、(一)イソシギは本種に比べて嘴と脚が短く、背面幾分淡色で、上尾筒とその附近に白色部が無く、體も小形で、鳴聲も遠ひ、(二)タカブシギは本種よりも小さい割合に脚が長く、上尾筒とその附近との白色部が狭小で、鳴聲が異り、(三)コアヲアシ、ギは本種に比べて、上面灰色に富み、上尾筒とその附近との白色部が狭小で脚が遙に長く、鳴聲も遠つてゐるから、何れの種類とも識別可能である。

タカブシギ XXI の 2

Tringa glareola (LINNÆUS) 鷓 科

獵。旅。鷓型。ムクドリよりも僅に小。少。クサシギに似た點はあるが、その差異は既に述べた通りである。鳴聲は清らかなピッピッピッピッ、チッチッチ等に聞こえ、飛立つ際は、大抵此聲を出す。食餌は水邊に棲む小動物の外、昆蟲類、蜘蛛類等も食べる。通常單獨乃至三四羽位の小群で居るが、渡來の當初などには、相當大群を見ることがある。以上の外、習性は概してクサシギに似てゐる。獵鳥としての價値や風致的關係等も略々前種と同様である。歐亞兩洲の各北部で蕃殖し、冬季南下の極限は、アフリカ北部、印度南部、南支那、濠洲大陸等に達する。我國では全土に分布し、千島では蕃殖するが、一般に棲住数は多くない。本種と見誤ることがあると思はれる鷓は、前記クサシギの外、イソシギとコアヲアシ、ギであるが、(一)イソシギは本種よりも脚が遙に短く、その割合に體が肥大で、體の後部を上下に動かすことが多く、飛んでゐる時翼に白色横帯が現れ（本種にはなし）、上尾筒とその附近とに白色部が無く（本種にはあり）、(二)コアヲアシ、ギは鳴聲、飛方、棲住場所等が本種に酷似してゐるが、嘴、頸、脚共に、體の割合上本種よりも著しく長く、色彩に灰色が多いこと等が主な差異である。





下巻巻末の日本産主要鳥類測定表

鳥名	全長(種)			翼長			尾羽長			嘴峰長			跗蹠長			翼開張			體重(匁)		
	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均	大	小	平均
ハシブトガラス	595	532	565	375	330	356	245	210	228	70	65	68	70	60	63	1195	985	1048	220.0	138.0	178.0
ハシボソガラス	540	462	502	347	300	324	212	176	195	60	45	53	65	57	61	1065	910	985	194.0	114.0	150.0
ミヤマガラス	495	436	468	336	300	312	185	160	173	62	50	57	55	45	52	947	882	895	154.0	95.0	
カサハギ	480	400	445	213	180	200	260	200	233	35	30	33	50	43	45	620	515	573	72.0	45.0	59.0
フナガ	385	342	365	138	130	135	230	200	218	28	26	27	36	34	35	428	380	406	21.9	17.6	18.9
*ホシガラス	365	325	347	195	178	187	143	125	135	45	40	43	42	39	41	603	573	594	63.0	38.0	
カケス	340	315	328	173	155	167	154	138	147	31	29	30	41	38	39	520	482	500	42.0	30.0	36.0
ムクドリ	243	225	238	135	123	129	70	63	68	27	24	26	31	27	30	412	383	404	26.0	18.0	23.0
コムドリ	198	183	192	110	102	105	54	48	51	17	15	16	26	23	25	328	303	318	18.0	12.0	14.0
シメ	192	179	185	108	95	105	58	52	55	21	19	20	22	20	21	325	302	314	17.0	12.0	14.0
イカル	235	220	228	115	106	111	86	80	82	24	22	23	25	22	24	342	320	332	23.0	16.0	19.0
オホカハラヒワ	162	146	155	92	81	87	65	55	61	12	10	11	20	17	18	277	250	265	8.2	6.1	7.0
コカハラヒワ	144	125	135	84	75	78	53	42	48	12	10	11	17	15	16	237	205	222	6.6	4.5	5.3
マヒワ	130	117	124	75	71	73	50	43	47	11	10	10.5	15	13	14	229	206	218	4.3	3.0	3.6
ベニマシコ	188	145	152	72	65	67	75	67	71	8	7	7.5	18	16	17	216	200		5.6	4.1	4.7
ウソ	161	148	156	88	79	85	67	60	64	10	9	9.5	17	15	16	266	245	257	7.9	5.7	6.7
*オホマシコ	180	162	173	95	87	91	74	65	70	12	10	11	21	19	20	285	257	274	8.9	5.8	7.6
*イスカ	186	170	180	100	90	96	70	60	65	19	16	18	19	17	18	290	265	281	11.8	9.0	10.4
アトリ	170	148	161	98	85	93	70	58	65	14	12	13	20	18	19	275	239	254	7.6	4.7	6.3
スズメ	148	135	144	75	65	68	57	50	53	12	10	11	18	16	17	234	213	227	7.0	4.8	6.0
ニウナイスズメ	144	131	139	75	67	70	52	46	50	12	11	11.5	18	16	17	228	208	220	6.8	4.7	5.6
ミヤマホッジョ	164	147	156	78	70	74	74	63	68	12	10	11	20	18	19	218	197		6.3	4.4	5.3
アラジ	163	151	158	74	70	72	70	64	66	12	11	12	22	18	20	225	208	221	6.7	4.8	5.7
ノジコ	148	135	142	74	65	68	60	52	56	11	10	11	19	17	18	215	196	206	5.8	4.4	4.9
ホッジョ	168	158	165	81	71	76	75	70	73	12	10	11	20	18	20	245	230	240	7.0	5.2	6.1
ホッアカ	165	148	160	78	68	73	70	60	65	13	10	12	22	20	21	234	213	231	7.0	5.1	6.1

現在の図鑑のほとんどが、この測定値を引用している

榎本佳樹著

下巻 野鳥便覧

菊半載百七十頁、掲載鳥類二百十六種
圖版三十二枚（四色版）

鳥学界の至寶榎本翁が五十年の收穫
明細正確なる原色畫は凡て翁の自筆

五月上旬發賣

定價二圓五拾錢

發行所

日本野鳥の會大阪支部

大阪市北區堂山町六八

堀田光鴻方

電話（市）二一六六番

振替大阪五二四九五番

實際役に立つ野鳥ガイドブック

「野鳥」誌での広告コピー

野鳥便覧下巻

菊半載百七十頁。掲載鳥類二百十六種。
図版三十二枚（四色版）

鳥学界の至寶榎本翁が五十年の收穫
明細正確なる原色画はすべて翁の自筆

實際役に立つ野鳥ガイドブック

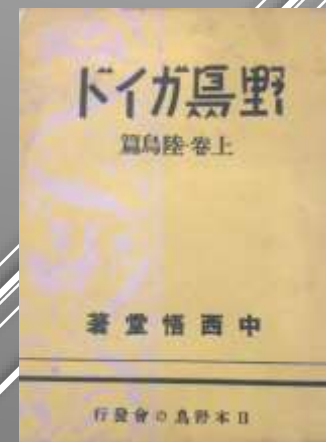
定価 二円五拾錢

参考：当時の物価

白米10kg: 3円25錢

4 中西悟堂の「野鳥ガイド」

野鳥ガイドは携帯用ではあるが、原色図はなく単色線画の挿絵（識別に役立つような精緻な絵ではない）が入れられているだけのもので、図鑑というよりも一般向けの野鳥辞典のようなもの



1938年3月10日
初版
この奥附は
1941年12月1日
の第4版のもの

野鳥ガイド 陸鳥編 1938年発行 195頁 モノクロ

初版1000部 戦後にわたり14版まで発行



ノスリ(鴞) 鷹鷹科 留鳥 禁鳥

(Japanese Buzzard.)

Buteo buteo burmanicus Hume.

方言 クソタカ、クソトビ、マグソダカ、タカ

色彩 上面は褐色で、頭部に混ざることのある白色は、稍々遠くからでも判ることがある。下面は風切先端部、尾羽、胸部、及び脇の褐色斑等を除いた他は黄白色で、飛んでゐる時の一特徴となる。但し個體によつて上下面共暗褐色のものがあるから識別のためには形にも注意せねばならぬ。雌雄同色。

形態 トビよりも僅に小形で、同鳥に比べて尾羽は短く、翼は長さの割合に幅が広い。静止間に頸を縮め、羽毛を膨らませて

丸くなつてゐることがある。

習性 山地の森林で蕃殖するが、平地にも居る。小獸類、蛇、蛙、昆蟲類、鳥類等を食餌とし、害よりも益の方が多い。樹木の頂や電柱などに長時間とまつてゐることがある。

鳴聲 ビー(イが高い)ときこえるが、鳴くことが少いから、識別に利用は出来ない。

飛翔 羽搏飛翔と帆翔とを交互にし、速度は遅い。帆翔を續けて圓狀に舞うてゐることが多く、其時の各翼の前縁は殆ど一直線をなしてゐるが兩翼は一直線をなさずに前へ傾き、への字を倒にした様になつてゐてイヌワシとの區別點となり、且翼端は上へと傾き、初列風切は指狀に開き其端は上方へ反つてゐる。尙翼の一種の運動によつて少時空中に静止してゐることもある。



ハチクマ(八角鷹) 鷹鷹科 留鳥 禁鳥

(Japanese Honey Buzzard.) *Pernis ptilorhynchus japonicus* Kuroda.

色彩 下面の色彩は個體によつて白色、黄褐、暗褐、暗赤褐等種々あり、又雌の下面は黒褐色斑のため速くからは暗灰色に見えることがあるから、色彩による他鳥との識別は容易でないが、尾羽にあるV形の黒色横帯は顯著な特徴となることが多い。上面は概して暗褐色で、顔は灰色である。雌雄同色。

形態 凡そトビ大で、大體の外形はサシバに似て、翼や尾羽の長さ等均齊はよくとれてゐるが、嘴は他の猛猛な種類のそれに比べて鈎曲の度が少い。脚は短く趾は稍々長い。

習性 山地の森林に棲み、蜂類の幼蟲、蠅等を主食とするが、時として他の昆蟲類、爬蟲類、小獸類、小鳥等も食餌とし、概して益鳥とされてゐる。

鳴聲 體の大きさの割合に小さく、稍々しい様な聲で、ビーウときこえるものと、サシバの聲に似たものがあるが、鳴くことは極めて稀である。

飛翔 概して直線狀で、短距離を飛ぶ時は主に羽搏飛翔により遠距離を飛ぶ時は帆翔を混ざる。翼の搏動速度は時によつて少し遅速がある。飛んでゐる時の形も略々サシバに似てゐる。稀に帆翔と羽搏飛翔とを交互にして、旋回飛翔をしてゐることもある。

ワシタカ類13種の解説は榎本佳樹によるもの
右 108頁ノスリ 左 109頁ハチクマ

はしがき (初版)

このごろ野鳥に關する一般の關心が活潑になり、山野に鳥を探ることも盛んになつてきた。本會ではこれまで多くの愛鳥家やハイキング團體、登山團體や學生、歌人や俳人や美術家諸氏を山野へ案内し、學校、官署、會社、新聞雜誌社、その他の公共團體の催す野鳥講演の需にも應じて來たが、その度に感ずることは、あまり専門的にわたらぬ常識的ガイドブック、廉價な携帯用の野外鳥類便覧があつたら自他ともに便利だらうといふことであつた。その考を實現したのが本書で、これまでの山野案内の經驗を基礎としてなるべく諸人の疑問の琴線に觸れるやう編述することに努めた。不完全な點も尠くないと思ふが、皆さんの御叱正を得て漸次改訂したいと思ふ。

本書の野鳥圖と裝幀とは一切平岩康熙氏を煩し、又本書中、鶯鷹科の鳥の解説はすべて榎本佳樹氏の助力を得た。ここに銘記して謝意を表したい。

尙本書上様に當り内田清之助博士の懇篤なる序を頂いたほか、編纂に際して伯爵清棲幸保氏、下村兼史氏、石澤蘇鳥氏、葛精一氏の助言を得たことを厚く感謝する。

昭和十三年二月

日本野鳥の會

中西悟堂

本書の初版が出た頃は、公衆の探鳥熱が、世間に登場した一つの新しい風潮として、漸く芽生えはじめた黎明期であつたが、その後僅々數年の間に、この風潮は豫想を超えて一般的となり、一方ではラヂオの各地鳥聲放送なども逐次一つの社會的行事となつて行つた。簡易なガイド・ブックでしかない本書の如きが、重版を續けて尙江湖の需めに應じ切れぬ現象も亦、本書の價值如何より、野鳥に關心を持つ人々が益々増加してゆくことの證左と見るべきであらう。私としても喜ばずにはゐられない現象であると共に、本書に對しては著者としての一層の責任を感じる。

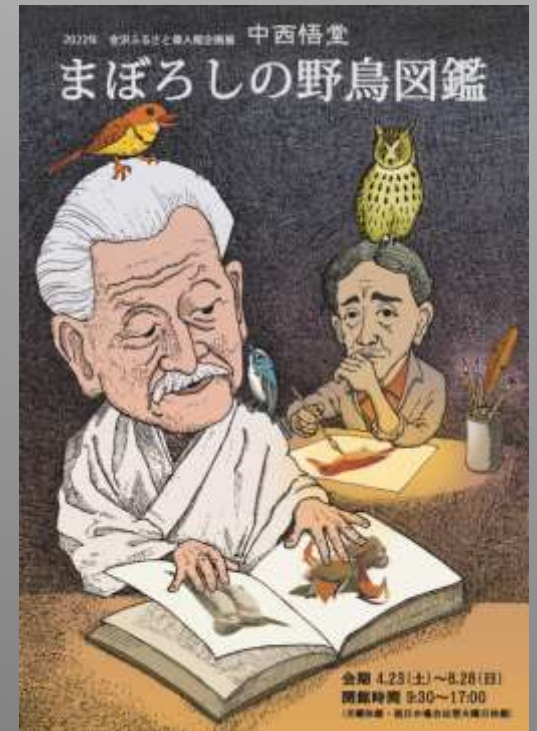
本書は始め日本野鳥の會で續版してゐたのが、過ぐる昭和十五年に舊日新書院の手に移つて、改訂第四版を出すことになつた機會に、なにがしかの修正を加へた。が、今回第十版を、新しい組織の日新書院から出すことになつたので、更にそこばくの補訂をした。また本書中の鶯鷹科の鳥の解説を乞ふた榎本佳樹翁が既に故人となられてゐることに對し、この際ふかい哀悼の意を表して置く。

まぼろしの野鳥図鑑

「陸鳥編」とあるように続編の「水禽編」を発行すべく解説文と鳥類画を下村兼史に依頼されたのですが、未刊に終わったということです。戦後、悟堂は原色図を用いた「原色野鳥ガイド」を何度か企画し、鳥類画家の小林重三（しげかず）に依頼し、画ができあがったものの、出版に至らなかったということです。

60～70年前に数度にわたり企画されては未刊に終わった「原色野鳥ガイド」、その発行のために準備された2通りの原画（一つは小林重三による水彩の鳥類画、もう一つは新たに発見された「野鳥ガイド陸鳥編」の線画と「野鳥ガイド・水禽編」（未刊）の鳥類画見本刷り）の存在が明らかになったのは、2020年のことです。

2022年4月～8月には金沢ふるさと偉人館で、それらの原画を紹介する「中西悟堂 まぼろしの野鳥図鑑」展が開催されました。



2022年9月、「原色野鳥ガイド」研究会（代表は悟堂の長女にあたる小谷ハレノさん）から、これら鳥類図鑑画350点を一挙に掲載した図録が発行されました（下）

野鳥図鑑画を満載した図録
好評頒布中

図録 幻の野鳥図鑑

『原色野鳥ガイド』

中西悟堂・企画 小林重三・画

A4判 166頁（うちカラー72頁）
定価：3,000円／発行元：『原色野鳥ガイド』研究会



60-70年前、
数度にわたり図鑑『原色野鳥ガイド』（通称）
が企画されましたが未刊に終わり、
お蔵りの原画だけが残されました。

幻の野鳥図鑑

『原色野鳥ガイド』

中西悟堂・企画 小林重三・画



甦る数十年前の鳥類図鑑画、350点一挙掲載

- 稀代の鳥類画家・小林重三による未刊に終わった鳥類図鑑『原色野鳥ガイド』の鳥類画
- 新たに発見された『野鳥ガイド 上巻・陸鳥篇』（1938）原画および『同 下巻・水禽篇』（未刊）鳥類画見本刷り



5 「野鳥」誌に見る榎本佳樹

榎本佳樹 野鳥誌掲載論文等一覧

昭和9年(1934年)5月～昭和19年(1944年)9月

野鳥		巻数	号数	頁	発行年	備考
野外研究	その他					
1	鳥類の鳴聲に就て	1	5	40	S9(1934)	
2	大阪市附近の渡り鳥	1	6	85	S9(1934)	
3	コアジサシの習性	1	6	61	S9(1934)	
4	ホトギスの夜間啼鳴に就て	2	3	6	S10(1935)	
5	ゴジフカラの鳴聲	2	5	10	S10(1935)	
6	フクロウの鳴聲	2	6	4	S10(1935)	
7	ブッポウソウとコノハヅク問題	2	8	65	S10(1935)	
8	ヨタカの鳴聲	2	12	18	S10(1935)	
9	巨椋池の鳥類観察	3	3	34	S11(1936)	
10	鳥類思出記(一)	3	7	23	S11(1936)	
11	鳥類思出記(二)	3	10	44	S11(1936)	
12	鳥類思出記(三)	3	11	29	S11(1936)	
13	鳥類思出記(四)	3	12	32	S11(1936)	
14	鳥と家屋	4	1	52	S12(1937)	
15	蕃殖前後の習性二三	4	5	35	S12(1937)	
16	吉野川大臺ヶ原の見聞鳥類	4	8	64	S12(1937)	
17	天王附近の鳥類視察	4	9	21	S12(1937)	
18	鳥類思出記(五)	4	11	7	S12(1937)	
19	鳥類思出記(六)	4	12	11	S12(1937)	
20	淀川河口附近本秋の鳥類	4	12	28	S12(1937)	
21		4	3	3	S12(1937)	
22		4	4	15	S12(1937)	
23		4	5	72	S12(1937)	
24		4	5	72	S12(1937)	
25	鳥類思出記(七)	5	2	15	S13(1938)	
26	鳥類思出記(八)	5	5	5	S13(1938)	
27	鳥類思出記(九)	5	6	52	S13(1938)	
28	大阪東北方山田池附近の鳥類	5	3	40	S13(1938)	
29	ゲンカンドリに就て	5	4	3	S13(1938)	
30	寒中のツバメ	5	4	19	S13(1938)	
31	クマタカ飛翔時の野外識別	5	8	1	S13(1938)	
32	樺太の鳥界一瞥	5	10	72	S13(1938)	
33		5	1	8	S13(1938)	
34		5	1	9	S13(1938)	
35		5	12	49	S13(1938)	
36		5	3	43	S13(1938)	
37		5	12	48	S13(1938)	

38	動物園で見た遠地の鳥		6	1	139	S14(1939)	
39	イヌワシの野外識別其他		6	2	18	S14(1939)	
40	ノスリの野外識別		6	3	25	S14(1939)	
41	チウヒ及びハイロチウヒ		6	4	14	S14(1939)	
42	隼類並に蒼鷹類の野外識別		6	6	17	S14(1939)	
43	ワジロワシとオホワシ其他		6	7	7	S14(1939)	
44	サシバ・ハチクマ・トビ・ミサゴ		6	8	15	S14(1939)	
45	鶺鴒千鳥類野外識別(一)		6	9	2	S14(1939)	
46	鶺鴒千鳥類野外識別(二)		6	10	22	S14(1939)	
47	鶺鴒千鳥類野外識別(三)		6	11	60	S14(1939)	
48	鶺鴒千鳥類野外識別(四)		6	12	32	S14(1939)	
49		仲哀天皇陵・住吉浦通信	6	2	72	S14(1939)	
50	鶺鴒千鳥類野外識別(五)		7	2	53	S15(1940)	
51	鶺鴒千鳥類野外識別(六)		7	5	19	S15(1940)	
52	鳥類思出記(十)		7	8	20	S15(1940)	
53	日本アルプス一部の旅		7	11	66	S15(1940)	東天井嶽附近の榎本・堀田・長久三氏の写真
54		書展の鳥の絵	7	5	57	S15(1940)	
55		北アルプスだより	7	8	166	S15(1940)	
56		東天井嶽附近の榎本・堀田・長久三氏	7	11	66	S15(1940)	
57	鳥類思出記第十一(満州)		8	2	132	S16(1941)	
58	雨の徳澤行		8	11	58	S16(1941)	
59		上高地より	8	9	2	S16(1941)	
60	鳥類思出記第十二(満州)		9	1	4	S17(1942)	
61	鳥類思出記第十三(満州)		9	3	12	S17(1942)	
62	鳥類思出記第十四(満州)		9	4	15	S17(1942)	
63	鳥類思出記第十五(満州)		9	5	51	S17(1942)	
64	鳥類思出記第十六(阿讃地方)		9	6	9	S17(1942)	
65	鳥類思出記第十七(阿讃地方)		9	9	5	S17(1942)	
66		大阪支部例会での一話	9	8	104	S17(1942)	
67		野鳥の会の回顧	9	8	76	S17(1942)	※直筆原稿撮影済
68	榎本佳樹氏古稀記念特集	経歴抜粋記	9	10	5	S17(1942)	50頁にわたる特集
69	鳥類思出記第十八(阿讃地方)		10	2	19	S18(1943)	※直筆原稿撮影済
70	鳥類思出記第十九(阿讃地方)		10	3	5	S18(1943)	※直筆原稿撮影済
71		鳥のおかげ(上)	10	4	46	S18(1943)	
72		鳥のおかげ(下)	10	5	45	S18(1943)	
73		鳥のおかげ追補	10	9	77	S18(1943)	
74		山口勝一氏を憶ふ	10	6	40	S18(1943)	
75		「野鳥」の廃刊を惜む	11	2	95	S19(1944)	終刊号

野鳥誌掲載論文（短報などを含む）は、計75本にもなる

鶺鴒・千鳥類野外識別

榎本佳樹

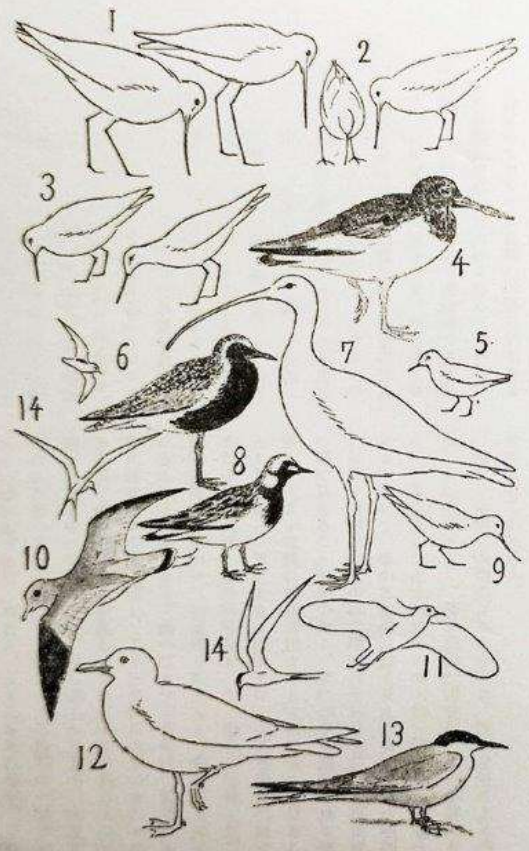
總説

一、鶺鴒・千鳥類一般特徴

大きさ

ホウロクシギとダイシャクシギの二種は、我國の鶺鴒・千鳥類中最大の種類で、共にハシブトガラスよりも大きい。

いが、鶺鴒中でそれ等に亞ぐチウジャクシギは、ぐつと大きさが下つて、ハシブトガラスと鳩（イヘバト）との中間位となり、又千鳥類中の最大種ミヤコドリは、チウジャクシギよりは大きい、ハシブトガラスよりは著しく小さい。而して他の種類は、鳩よりも餘程大きい位のものから、鳩大、鳩よりも小、鶺（椋鳥）よりも大、鶺大、鶺よりも小、鶺雀大等種々になつてゐて、それ等の中の最小種トウネンの小形個體はスズメ位しかない。従つて鶺・千鳥類では、ホウロクシギとダイシャクシギと



まゝ續けざるに食ふることなく、矢張り鶺鴒と違つた點が認められる。これは我國で最も普通のダイゼンとキアキシギと位について、比較觀察を試みたら判ることである。

である。

○、千鳥類略畫説明 1 オホソリハシシギ(左)とラゲロシギ、2 オホソリハシシギ(右、側面)とチウジャクシギ(左、此方同)、3 キアシシギ(右、小形個體)とハマシギ(左、大形個體)、4 ミヤコドリ、5 トウネン、6 夏羽のダイゼン(背景は飛行中の冬羽ダイゼン)、7 ホウロクシギ、8 キョウジョシギ、9 ソリハシシギ、10 飛行中のケリ、11 同タガリ、12 ウミネコ、13 アササシ、14 飛行中のコアササシ。1、2、3はそれぞれ略同極尺、其他は極尺不同。

シギ・チドリ類の野外識別方法について、昭和14年9月号から6回にわたり「野鳥」誌に連載

野鳥 第九卷・第十號 目次

表紙・扉及目次カット

小杉放庵

榎本佳樹氏古稀記念特輯

經歴拔萃記	榎本佳樹
理想的生態學者	川村多實二
榎本佳樹翁あれこれ	山口勝一
榎本佳樹翁(尊)	中西悟堂
鳥學界の至寶榎本佳樹翁	安部幸六
榎本先生の記	平松道夫
榎本先生に従つて	藤原廣藏
榎本先生の古稀を祝して	堀田光鴻
榎本佳樹先生の片影(追憶)	山崎静子



わたくしの思ひ
 恩師の古稀を祝ふ
 榎本翁管見

山崎静子
 岡田稔
 中西悟堂

榎本氏よりの近信……(三七)
 アヲサギ養殖の大頓挫・佳樹(三七)
 榎本佳樹翁古稀記念寄附募集……(三七)

観覧察談
 土堤に横穴を穿つた雀の巢
 サンコウチウの受難
 キセキレイ、カヘル、クモ

三島久人
 土岐貞友
 山縣深雪

板橋區練馬にイハツバメ……河野漢(三七)

かゝるがもに就て
 虎鶉の鳴く日

隅田葉吉
 久野賢太郎

榎田光鴻氏の野鳥生態叢書・情堂(三七) 本郷坐籠ケ峰鳥屋庭見學會報告(三七)
 研究部の申合せ(三七)・移籍(三七) 九月號誤記訂正(三七) 後記・悟堂(三七)

寫眞
 榎本佳樹翁近影
 住吉浦に於ける榎本翁

口繪
 平岩廣照

榎本先生に従って 藤原廣蔵 (抜粋)

「一億人の日本人中、鳥類愛護の必要なことに気がついている人は、多くとも一千人位」で「保護に努めなければならぬと云う考えを持っている人は、多分百人にも達しないであろう」と常に嘆いて居られる先生である。

狩猟等による乱獲、採卵等は勿論のこと、各地の干拓や開拓、あるいはいわゆる害鳥駆逐等に関し、鳥類保護ないし絶滅防止上、独特の御持論があって、言葉に文章に、機会ある毎に鳥類愛護の要を声高く説いて居られる先生の姿は「鳥類に関する研究、鳥類愛護の思想普及」を以て目的とする日本野鳥の会としても、全く典型的な存在と云ってよいだろう。

尚、余技として先生は擬声が仲々お上手である。アヲバヅクを寄せる位はお茶の子で、キジバトの鳴声は有名なもの、いつか大阪支部の探鳥会で岩湧山に行った時、未明からの雨模様で鳥声少なく、先生、退屈凌ぎに、アカセウビンを真似て、「こういう時に本当にこれが聞けたら仲々乙なものですがなあ」と半ば独り言の様に云って居られたところ、意外にも数刻後、それまで岩湧では全く予期されなかったアカセウビンが、本当に鳴きだしたのである。この時ばかりは、先生手を打って喜ばれた事を覚えている。

榎本翁管見

中西悟堂

榎本翁の原稿ほどうつくしい原稿は少い。うつくしいというのは単に文字のきれいさを言うのではない。いわゆる作法格式というより真の内発的意味における折目正しさ、他人に迷惑をかけまいという行届いた配慮、それが何十枚の原稿にも隅なく行きわたっていて、一枚半は愚か、一字一劃といえどもかつて乱れたためしもなければ、唯一つの崩し字もない。私は一編集者として多くの文字に接し、また別のところで芸術家の多くの原稿に接する機会を持っているがこれほどあらゆる意味において美しく正しい原稿は少ない。 後 略



榎本直筆原稿 / 金沢ふるさと偉人館蔵

榎本佳樹氏古稀記念特集

後記

悟堂生

ふとうふくつ

- 本号は榎本佳樹氏の古稀を祝する特集にした。不撓不屈五十年、はげしい世浪と闘いながら、鳥への愛と知識とを護りつづけてきた先覚の痕をたづねることは無意味ではない。榎本翁の徳の光が、幸いにしてよい原稿が沢山頂けてうれしい。まだ大阪の森田淳一博士、神戸の小林桂助氏等お願いしたい方は少なくなかったが、頁の都合上これだけにさせて頂いた。
- このごろいわゆる科学する心は色々社会的な形で益々奨励されている。逞しく知識を追求することは緊要事であり不可欠事であるが、ややもすれば功利的な卑しさを感じさせられることも一再でない。何か大きなものを忘れている気がされて、人間の大事はそれだけか？と言いたくなる。そういう意味でもこの知行合一の人、榎本翁の特集は何かを示唆していると思う。

「野鳥」誌上の榎本佳樹の記事は当時の状況を知る貴重なもの

「大阪市附近の渡り鳥」 「野鳥」1巻6号 1934年（昭和9年）6月 から

- ・キアシシギ 春秋共に一箇所では300羽以上の群を見ることは珍しくない。
- ムナグロ、キョウジョシギ 一箇所では200羽以上
- ツルシギ 一箇所では400羽以上
- チュウシャクシギ 一箇所では5、60羽（春秋同数）
- オオソリハシシギ 一箇所では200羽以上（秋に多く春に少ない）
- ・渡来数の中程度なのがハマシギ 一箇所では30余羽、トウネン5、60羽、メダイチドリ 30余羽、コチドリ、シロチドリ等
- ・少い部に属するのは
ダイゼン30余羽、ダイシャクシギ、ホウロクシギ混合10余羽、ソリハシシギ3、4羽、ミユビシギ30余羽、オグロシギ14、5羽、アオアシシギ6、7羽、アカアシシギ13、4羽、オバシギ4、5羽或年40羽

「淀川河口附近 本秋の鳥類」 1937年（昭和12年）から

- ・ホウロクシギ10羽余、ダイシャクシギ30羽余、オオソリハシシギ200羽余、オグロシギ20羽以上
- 近年大阪附近の鷺・千鳥の棲住地が激減して、同所の狭小な一地域だけが只一箇所、風前の燈火の形で残っているので、従来数箇所へ渡来していたものや、或はそれ等の後裔（こうえい）者等が其處へ寄集って来たと言う様なことも無いとは限らぬと思ふ。

「野鳥」の廃刊を惜しむ

榎本佳樹 「野鳥」終刊号 昭和19年

「野鳥」は鳥類に関する同種の雑誌としては、我国で唯一のものであっただけに、初刊が出てから十年近くの間、野鳥に関する知識や趣味の普及に、貢献するところおびただしいものがあつたが、今度の整備によって、いよいよ廃刊の止むなきに至つたのは惜しいことで、実に遺憾至極である。私の野外研究の一端が、拙稿となつて「野鳥」に掲載されたことが少なくなつたお蔭で、一般の人々から人間並に取扱つてもらう資格も実力もない一老骨の私が野鳥に興味を持つ多くの人の知遇を受ける様になつたばかりでなく、それ等の人々の中に、私の著述や野外研究などに関して、多大の後援や激励を与えてくれる人さえ出来た。

なお「野鳥」には、度々私に対する一部会員諸氏の種々な称賛の辞が出たり、又私の「古稀記念号」が特集されたなど、感謝に耐えないこともはなはだ多い。

それから私の研究し得ている事柄は、価値に乏しいものではあるが、もしも「野鳥」に連載されるとしたら、私が今後相当長生をしても、一生の間に書表せるかどうか判らぬだけの量があるので、これからも大いに書かせてもらうつもりで、ことに野鳥の生態や保護などに関することに、一層力を入れたかったのである。

中 略

…昭和十八年九、十月号の、「鳥のおかげ」追補の拙稿が、私の「野鳥」への最終稿となつて、今までの「野鳥」と運命を共にすることになるのか（本稿が締切後の送稿になつたので）、或いは再生の「野鳥」への拙稿が出せる喜を見るか、何れとも不明であると言わざるを得ないのは、いささか心細い感じもするが、これも致し方のないことであるから、兎に角「野鳥」に別れを告げて、その再生を祈る次第である。



文芸春秋 昭和17年11月号

中西悟堂が「野鳥を追う人々」として、川口孫治郎、榎本佳樹、中村幸雄、仁部富之助の四氏を紹介 「野外鳥学の四天王」のうち、榎本についてを最も紙幅を多く割いて紹介している



榎本は、文芸春秋での記事のおかげで、世間に知れ渡り、意外な人や久しく交際の中絶していた旧友などから称賛の手紙が来るというありさま、人から褒められたことが無い私が多くの人から称揚されるような奇跡に邂逅したと悟堂に感謝している。

榎本佳樹が遺した言葉

◆大阪府鳥類の将来と保護について（抜粋）

鳥類の将来に関しては実に寒心に堪えないものがあり、大阪府では特にそれが甚だしい様に思われるから、鳥類を愛好する人や、鳥類研究を事とする人等は、鳥類に関する知識に愛護心の普及に努めることを第一の急務とせねばなるまい。

大阪府郷土博物誌 第1編（昭和9年6月刊）大阪府の鳥類について
初の大阪府鳥類目録 確認種＋確実と推定される192種をリストアップ

◆鳥類は国有の宝物である。今の時代に生きている人間だけが楽しんで、その後は絶滅しても差支えないというものではない。われわれが楽しんだと同様にわれわれの子々孫々までも楽しませるべく、その保護と増殖に力を尽くすことは義務である。

◆人生は短いじゃ。短い人生のしかも限られた観察の機会を逃しては惜しい。生きている間により一羽でも多くの鳥の姿態を観察すべきで、同じ見慣れた鳥でも天候や四季の関係や、光線等の関係で想像も及ばない様な状景に接することがある。例え見なれた道を幾たび通っても、自然観察者としては絶えず注目し、一羽の鳥といえどもおろそかに見逃してはならない。

6 生誕150年記念事業について

榎本翁の野鳥の生態研究と愛護運動の足跡を多くの人々に伝え、改めて野鳥の保護について考えてもらう契機に

【事業の内容】

- ・「野鳥便覧」復刻版（上下巻・解説含み1冊に）の発行
- ・榎本佳樹の足跡をたどる探鳥会

2023年1月14日：山田池 2月18日：古市古墳群探鳥会

5月4日：比叡山 京都支部と共催事業
榎本佳樹生誕150年

&川村多実二生誕140年記念

- ・記念事業特別展の開催

2024年2月 きしわだ自然資料館

榎本佳樹の功績、当時の大阪の自然や鳥類の状況、他に鳥類図鑑の変遷等を展示予定

※2022年度はプレ企画として講演会等を開催



京都支部比叡山探鳥会
での川村多実二と榎本
昭和14年5月28日

（中西悟堂撮影）

日本野鳥の会大阪支部ホームページで さらに詳しい情報をご覧ください



榎本佳樹
生誕150年記念事業
ご案内



**「野鳥便覧」
を読む**

日本野鳥の会大阪支部 室内例会
2009.9.13
担当 納家・上村

日本野鳥の会大阪支部 第4回オンライン野鳥フォーラム第2部 2022.8.29
榎本佳樹生誕150年記念事業 プレ企画第1弾

**榎本佳樹の見た
シギ・チドリ**

- 1 榎本佳樹とは
- 2 大阪支部の宝「野鳥便覧」
- 3 「野鳥」誌に見る榎本佳樹
- 4 榎本佳樹の見たシギ・チドリ
- 5 生誕150年記念事業について

担当 なや 納家 ひとし 仁



大阪住吉浦にて
1936年（昭和11年）12月

榎本佳樹翁

中西悟堂



古稀にならうと、自分の仕事だから
高山深谷も想つるのだといふ。
真夜中の空を想像が過ぎて
自分の仕事だから、がはと起きるのだといふ。
肩書や世の事業には用もないから
始めから背中を向けてゐるのだといふ。
あゝ樹々と、山野に鳥をみつめて五十年
それは市井の弊ではない。

家族が墓場から買物行列にも立つ義のすがた。



發汗左家や處は必要がないから
一俵市譯の質素を著す榎本翁。
不潔な取引は性に合はないからしたことがなく
不正直は餘ひだからしない榎本翁。
正しく、清潔に、この世に生き
慕然に、まじめに、天賦の職にしたがふ
通俗の塵を隔てた本氣な生涯！

私は見た。
野服をびつしより濡らす汗も、老節も忘れて
双眼鏡をたどひたと水禽のむれにあてがひながら
眞愛灼熱の砂洲に立ちつくす不老翁の業を。
私は見た。
筋括を兩足でしつかりと支へながら
放めゆく歌外の鳥にひたすら左双眼鏡を向ける
電車の中の老眼察者の澄んだ業を。

仕事をもちとしたいから百歳までも生きたいといふ。



寸暇を惜しむから
人まへにひつぱり出されたくはないのだといふ。
致々として、人目につかぬところで
自分の仕事の職を初いできた野の遺賢！
一徹、他念も世の美種物もない
稀代の野外彫刻者の仕事だから
遊いところで、世のためになるのだ。

たつよりと充された生涯の
美しい老年のみどり！
仕とたゝかつてきた嵐のなごりが
むしる恋社な影をその襟に宿しても
いまは優しくすべてを許す
夕照のあをぞらの水々しさ！
この人を想ふだけで
この世の辛い一日が淨められ、償はれる。

(古稀に書せて)

中西悟堂と榎本佳樹

悟堂がいかにも、榎本翁のことを尊敬し、大切に
思っていたかがよくわかる詩
「野鳥」榎本佳樹翁古稀記念特集号に掲載されてい
る他、悟堂の詩集「叢林の歌」(昭和18年)にも収め
られている



おわり

(引用、参考文献 主なもの)

: 日本野鳥の会「野鳥」102号 昭和17年11月号

榎本佳樹翁古稀記念 特集号他

藤原廣蔵「大阪支部のあゆみ」1970年支部報NO39

「原色野鳥ガイド」2022年 原色野鳥ガイド研究会

中西悟堂協会ホームページ <https://nakanishigodo.wixsite.com>